中等学校英語教員に求められる知識・能力とは何か

― 韓国中等学校教員任用選考試験（英語専門筆記）に関する実証的研究 ―

脇　田　博　文

▶ Key Words

Korean employment examinations,
first-stage written English tests,
Korean secondary school English teachers,
knowledge and skills required

Summary

This study is a part of a large-scale research project to improve Japanese employment examinations (first-stage written English tests in particular) and the present English teaching curriculum in universities. To this end, it is of great significance to compare the Japanese secondary school teacher employment examinations with Korean ones, as these countries have a fairly similar framework for both teacher training and recruitment, and teacher employment examinations play an important role in recruiting teachers.

The teacher employment examinations in both countries are divided into two stages depending on open competition. The first- and second-stage tests have many similarities: for example, the first-stage tests are written tests and, roughly speaking, focus on the study of education and major subjects, while the second-stage tests attempt to assess candidates' personality and aptitude as a teacher as well as more practical teaching abilities. Nonetheless, there are some differences. One of the striking features is that the Korean first-stage test is strictly controlled in terms of content, point allocation, testing time, etc. The most significant difference in the first-stage test is that the Korean test is a criterion-referenced test, whereas the Japanese exam is a norm-referenced test.

This paper focuses on Korean first-stage written English tests and aims at identifying what skills and knowledge *are* assessed by analyzing two types of tests (the national type and Seoul-Inchon type) conducted from 2002 to 2006. In conclusion, other findings of skills and knowledge identified are also discussed and ways to improve the employment examinations are proposed.

1　はじめに

本研究は、良質な教員採用試験（英語専門筆記）［以下、英語専門筆記試験］の研究開発及びその波及効果の検証の一環として、韓国中等学校教員任用選考（英語専門筆記）試験の出題傾向を分析し、その課題を検討することを目的とする。

これまで、英語教育を取り巻く環境や教員採用制度などにおいて非常に近い位置にある韓国との比較に立って、日本の中高英語教員を対象に日本と韓国の英語専門筆記試験に関する意識調査を行い、教員採用試験としての有効性・妥当性について検討してきた（Matsumura & Wakita 2006、Matsumura & Wakita 2007、脇田・松村 2007）[1)]。しかし、研究の前提として、優秀な英語教員を担保する制度として日本及び韓国の採用試験制度や英語専門筆記試験がどのように機能しているのか、またその試験でどのような知識・能力が求められているのか、精査する必要がある。つまり、国及び地方レベルでの関連政策及びその最新動向は当然のこととして、特に本研究のテーマである英語専門筆記試験の内容・形式などの分析・検討を行うことは、今後の研究の方向性を決める重要な指針となると考える。

以上の問題意識に基づいて、本稿は、まず韓国の教員採用試験制度及び第１次試験として実施される英語専門筆記試験の一般的特徴について概観した上で、過去５年間分の英語専門筆記試験問題を分析し、その特徴と問題点を明らかにする。

2　韓国中等学校教員任用試験に関する先行研究等

韓国の教育公務員任用候補者選定競争試験［以下、任用試験］は公開試験として政府の厳しい管理・統制の下に実施されている。これは、我が国の教員採用・選考制度が国の緩やかな改善への指針――例えば、教育職員養成審議会第３次答申は、教員の一定の水準を担保する観点から採用・選考制度の多様化、良質な学力試験問題の研究開発を強く求めている――に基づいて、各政令都市・都道府県教育委員会が自律的に選考を実施しているのとは異なる。

この任用試験制度は1990年に導入されて以来、絶えず大きな社会的関心を集め、議論と批判の対象となってきた。韓国教育開発院（Korean Educational Development Institute：KEDI）の報告書（김이경 외 2004）によれば、2004年９月に教育人的資源部長官の諮問機関として特別委員会が設けられ、より公正で妥当性の高い教員任用制度を構築するために、大学・市・道教育庁・教員団体・PTA・教育専門機関などから17人の関係者を集めて制度の検討が行われた。その中では、任用試験の意義と重要性、導入以来の経過と問題点、受験資格、適格な人材を担保するための試験の妥当性・信頼性、試験の運営・管理方法、教員養成課程との一貫性及び試験の教員養成課程への波及効果など、詳細多岐に渡って提言が行われている。

1次筆記試験（教育学と専攻）については、他の研究報告など（Kim & Han 2002；Korean Educational Development Institute 2003）も併せて参考にすると、次のような問題点が指摘されている。まず、①1次筆記試験が過度に重視され、断片的知識の暗記に偏りすぎている、②内容的にもパターン化し、類似している、③このために教師の実践的指導力や適性を評価できていない、④熾烈な競争のために教員志望の学生が受験準備に追われ、大学での教員養成課程にも悪影響を与えている、⑤任用試験対策のために予備校通いが盛んになっている。このような問題点を鑑みて、上記特別委員会は、1次試験の信頼度・妥当性を向上させると同時に、教員としての適性・能力を面接や論述試験、模擬授業などで評価する2次試験を充実させ、比重を強化するという答申を提出した。しかし、このような1次試験に関する数々の批判的な指摘にもかかわらず、これまで英語専門筆記試験については問題形式や内容などの本質的な点についてはほとんど変更が見られない。これは、恐らく、任用試験制度が大学の教員養成課程や採用過程において大きな波及効果を及ぼすために、正当な理由なく簡単に国が定めるガイドラインを変更できないからだと推測する。

任用試験制度や英語専門筆記試験に関する先行研究について言えば、比較教育学・英語教育政策の観点から教員養成・採用・研修について制度として概観したもの（Kim・Han 2002; 河合 2004；Fouser 2004；佐野 2005）が若干ある程度である。英語専門筆記試験そのものについて踏み込んだ研究は、日本の英語専門筆記試験の有効性・妥当性及びその波及効果に関する脇田・松村の上記の研究以外には特に見あたらない。この意味で、それらの研究は先駆的な研究であると言ってよい。

脇田・松村（2007）及びMatsumura & Wakita（2007）は、日本と韓国の比較に立って、教員採用試験制度や試験問題の一般的特徴を明らかにした上で、日本の中学校・高校英語教員を対象として実施した日韓教員採用試験（英語専門筆記試験）の有効性及びその波及効果に関する意識調査に基づいて、授業で求められる力、英語専門筆記試験で測定すべき力、大学教員養成課程で身につけるべき知識・能力などの項目を立てて、実際の試験問題を使用しながら、優秀な英語教員に求められる能力のminimal requirementsを特定し、英語専門筆記試験でどのような力を測定するべきかという問題を追求するものである。そして、英語専門筆記試験では「教授法などの基本的な英語教育に関する知識」、次に「授業を構想する実践的指導力」やTestingなどの平常の指導において重要な専門的能力を、できる限り英語で、評価するべきであると結論づけている。併せてまた、このような英語教員の知識・能力指標の構築が、EFLのコンテクストにおいては、特に重要な課題であると提言を行っている。

3　韓国中等学校教員任用制度及び教員任用試験

韓国の任用（英語専門筆記）試験の傾向分析と考察に入る前に、教員任用試験制度及び英語専門筆記試験に関する最新の動向について触れておきたい。なぜならば、教員任用試験は、日本と同様に、韓国でも優秀な教員を担保するために重要な役割を果たしているが、総体的に似通った採用システムを取りながらも、システムや試験を詳細に比較すると顕著な違いが見られるからである。

(1) 教員任用制度

韓国の国公立初等学校及び中等学校の教員は公開任用選考試験によって任用される。この試験は「教育公務員任用候補者選定競争試験規則」に概要が規定され、明確な国のガイドラインに則って公正かつ厳格な統一システムとして機能することが求められている。だが、この制度の1990年導入以来の経過を見る限り、決して安定したものではなかった。

そもそも1990年以前においては、国公立初等・中等学校の新規教員採用は、教育公務員法第11条1項に基づき国公立の教育大学または師範大学卒業者が優先的にしかも無試験で任命され、そしてその後、私立短期大学や国公立・私立4年制大学の教職課程を修了した者が採用優先順位を決定するための試験を受けて不足分を補うというシステムであった。当然、このいわゆる師範系卒業者の優先採用規定によって、教職課程修了者である非師範系大学卒業者は著しく採用に不利益を被ることになる。この差別は、1980年代後半に教師希望者が供給過剰になり、非師範系大学卒業者対象の任用試験が中止されるという事態が生じると、深刻な問題となり、優先採用規定の適合性を訴える憲法訴訟にまで発展した。1990年10月に、憲法裁判所は、憲法の「平等と職業選択の自由」に違反するとの判断を下し、同年12月31日に教育公務員法が改定されることになった。この結果、国公立初等・中等学校の教員は、それまでほとんど排除されていた私立大学にも門戸が開かれることになり、教員免許を保有する全ての者に対して平等な公開選考方式、つまり公開任用試験に基づいて採用されるようになった。これ以降も長らく師範系大学卒業者に対しては大学成績加算点が付与されるという優遇措置がなかったわけではないが、現在では選考試験における公平性・透明性は確保されていると言ってよい。

以上に述べた任用選考試験に係る問題は、そもそも韓国が「高等教育法において、目的型教員養成機関体制として教育大学と師範大学を一般大学と別途に規定している」(佐野 2005) こと、また、旧来の目的型教員養成制度と開放性 (教職課程) に基づく新教員養成制度が折衷した形で教員養成が行われてきた制度的な矛盾にある。だが、韓国の教員養成制度は、教育課程基準の抜本的見直し、現場主義の推進 (教育実習期間の延長、学校現場との交流)、養成機関の評価認定制など、優秀な教員を確保することを目的として、2005年から、2012年を目途として段階的に改革が行われようとしている。その一環として、現行教員任用試験制度についても2008年度に変更・改善が行われる。

(2) 教員任用試験

現行 (2007年度) の教員任用試験は、日本と同様に2段階選抜の公開試験である。その採用のプロセスの概要は次の通りである。まず、第1次試験は、その年度の採用教員数を11月に確定した後、初等学校の場合は11月末頃、中等学校の場合は12月上旬に実施される。この1次試験は筆記試験であり、韓国教育課程評価院 (Korean Institute of Curriculum and Evaluation: KICE) が試験問題を作成・採点し、任用権者である全国16のソウル市・道教育委員会が実施する。問題の種類はソウル・仁川型と全国型の2種類があるが、内容・形式にはほとんど違いがない。現行の試験内容及び配点は、教育学 (教職関連科目) 20%【選択型問題】、専門科目80%【記述・短答型問題】、合計100点となっている。これに大学在学成績が20点、その他加算点10点が1次試験の点数に加わり、合計点数は130点となる。1次試験合格者は成績順に決定され、採用枠の130%の人数がここで確保される。続く2次試験は2月初旬に実施され、①論

文（普通1000～1200字を50～90分内で作成）、②面接（教員として適性、教職観、人格、素養及び専門性などを英語で評価、Native Speakerによる英語ヒアリング及び会話能力の評価）、③模擬授業などの実技評価（学習指導案の作成と模擬授業）など50～60点分が課せられる。最終合格者の決定は1次・2次試験を合算して、高得点順に30％を脱落させて採用定員を最終的に確保する。有効期間は2年間である。

上述のように、この教員任用試験は、数々の批判を受けて2008年度に変更される。試験は、表1が示すように、全体の選考過程が2段階から3段階になる。1次試験は、筆記試験50点（教育学10点；専門科目40点）・大学在学成績（10～20点）、加算点（5点）という構成になり、特に筆記試験の影響力が総点の内約55％から約35％に減らされること、解答形式がすべて5肢選択になること、TOEIC・TOEFLなどの外部標準テストの成績加算点が大幅に減らされたことが変更点として注目される。さらに、この段階でかつては130％を選抜することになっていたが、今度は200％以上選抜と緩和される。2次試験では、専門科目（教科教育学＋教科内容学）と教育遂行能力を評価するために論述型試験（40点）が実施され、この段階で150％以上に選抜される。これを受けて、3次試験では教職への適性を見るための面接及び授業実技能力評価（35点）が実施され、最終予定人数が確保される。要するに、今回の変更は、これまで採用試験に決定的な重みを持っていた1次筆記試験への偏重を是正し、選考方法や評価方法を多様化することで、教師としての資質・適性、つまり人物や、実践的指導力をより重視する方向にある。

表1　2008年度以降の教員任用試験制度

区分	現　　行	2008年度以降
1次試験	▲筆記試験（100点）：教育学（20点、4肢選択）、専攻（80点、記述・短答型） ▲大学在学成績（20点） ▲加算点（20点）	▲筆記試験（50点）：教育学（10点、5肢選択）、専攻（40点、5肢選択） ▲大学在学成績（10～20点） ▲加算点（5点）
	130％選抜	200％以上選抜
2次試験	▲論述、▲面接、▲実記評価 ＊教育庁別に50～60点を付与	▲専攻論文型試験（40点） ―教科教育学＋教科内容学＋教育学
	100％選抜	130％選抜
3次試験		▲教職適性深層面接及び授業実技能力評価(35点)
		100％選抜
合格者査定	1次試験＋2次試験点数合算（130点）＋50～60点）	1次試験＋2次試験＋3次試験点数合算（65～75点）＋（40点）＋（35点）
特徴	＊1次試験中心型 ＊筆記試験の影響力が過多（総点の55％程度）	＊2～3次試験の配点基準を拡大及び適格者の選別機能を強化 ＊筆記試験の影響力を縮小（総点の35％程度）

出典：佐野（2005）.「韓国の教員養成」『世界の教員養成Ⅰ　アジア編』pp.35-57、日本教育大学協会。

(3)　英語専門筆記試験の特徴

日韓の英語専門筆記試験はシステムとしては類似しているが、試験の形式・内容などの詳細は大きく異なる。特に、日本の試験形式がnorm-referenced test（集団基準準拠テスト）であるのに対して、韓国の場合はcriterion-referenced test（目標基準準拠テスト）をとっている点

は顕著な違いである。つまり、日本の試験は総合的な言語能力に関して全体の中での相対的な位置を調べるのに対して、韓国の試験が目標に定められた特定の言語項目がどれほど達成されたかを絶対数値として調べるものであるという性格を持つ。これは両国の試験の特徴として注目すべき点であり、伝統的な大学入学試験を反映していると考えられる。

韓国の現行英語専門筆記試験は、内容、配点、試験時間などにおいて明確な国のガイドラインが示され、厳格に統一されている。試験時間は150分、問題数は20問程度、配点は80点で、教職関連科目の配点が20点であるのに比べると、かなり専門科目が重視されている。全国型及びソウル・仁川型２種類の問題の解答はすべて記述式で、80％が英語で解答することが求められる。内容についてもガイドラインが設定されていて、2004年度においては教科教育学20～30％（英語教育学25％）、教科内容学70～80％（一般英語40％、英語学20％、英文学15％）という割合である。さらに詳細に見れば、英語教育関連では言語習得論、教授法、４技能などの指導法、テスト・評価など、また英語学関連では音声学、形態論、統語論、語用論、意味論、学校文法、英語史など幅広い知識が要求され、英語専門筆記試験の準備にはかなり専門的かつ系統的な勉強が必要となる。

なお、日本の場合[2)]は、総合的な観点から資質能力を評価する傾向が強いので、韓国ほど厳格な選考基準を持たず、また専門科目（英語）の配点比重も韓国ほど重くないと考えられる[3)]。試験内容は、概ね文法・語彙、長文総合問題、英文和訳・和文英訳、教育課程、授業案作成などで構成されているが、各都道府県によって出題内容はさまざまである。また韓国とは違って、伝統的な日本の大学入試を反映して英文読解が中心であり（Oi & Sasajima 2004）、ほとんどの問題が多肢選択か日本語による解答方法をとっている。

4　英語専門筆記試験の分析及び考察

(1)　分析資料

2002年度から2006年度まで５年分の英語筆記専門試験（各年度ソウル・仁川型と全国型の２種類、合計10試験、207問題）を分析した。

(2)　分析内容及び方法

本稿では、まず試験問題全体を概観する意味から、①年度別問題数、②試験問題のジャンル（一般英語、英語教育、英語学・言語学、英文学）、③解答使用言語及び解答形式について分析を行う。これを踏まえて、試験問題のジャンルである④一般英語、⑤英語教育、⑥英語学・言語学、⑦英文学について個別に検討を加える。これらの項目は規定されたガイドラインに則ったものである。

最後に、上述の分析カテゴリーとは異なり、各試験問題がそもそもどのような知識・能力を「使う」ことを求めているのかという観点から、各問題の⑧認知レベルについて分析を行う。このような分析方法についてはまだ明確な理論的枠組みは構築されていない。だが、問題解決に際して英語教員志望者がどのような知識や能力をどのように活用するかといういわゆる認知プロセスを重視した分析は、今後「反省的実践者」としての英語教員の知識・能力を特定する上で大事な視点になると思われる。というのは、個人の持つ知識や能力――曖昧であるがコン

ピテンスという概念が（ライチェン・サルガニク 2006）が相当するかもしれない――は、本来社会的文脈と相互作用的な関係、状況依存的な関係にあると考えられるために、たとえ筆記試験であってもより状況依存的な問題解決が与えられれば、持てる知識・能力をホリステッィクに活用してその解決にあたろうとするものだと考えられるからである。

したがって、本稿では、表２が示すように、仮説としてこれらの認知レベル指標を３段階に分け、低次なものから順番に、レベルⅠ：言語及び英語教育などに関する知識を記憶する能力、レベルⅡ：言語及び英語教育などに関する知識を特定の状況・文脈に応用する能力、レベルⅢ：言語及び英語教育などに関する知識を利用して何かを達成する能力に設定する。さらに、状況依存的、相互作用的な知識・能力観に立って、これらの分類により適切な用語を求めれば、日本の大学入試に典型的な語彙・語法に関する問題のように決まり切った問題解決を行う知識の「再現」レベル、次に内容要約や指示文を説明する場合のように文脈を類推し、解釈を行い、知識を何かに「関連づけ」て応用するレベル、そして英語でエッセイを書く場合のように「熟考」した上で何かを独自に「創造」するレベルとしてそれぞれ考えることが可能であろう（脇田・松村 2007）[4]。

表２　認知レベルに基づく問題分類

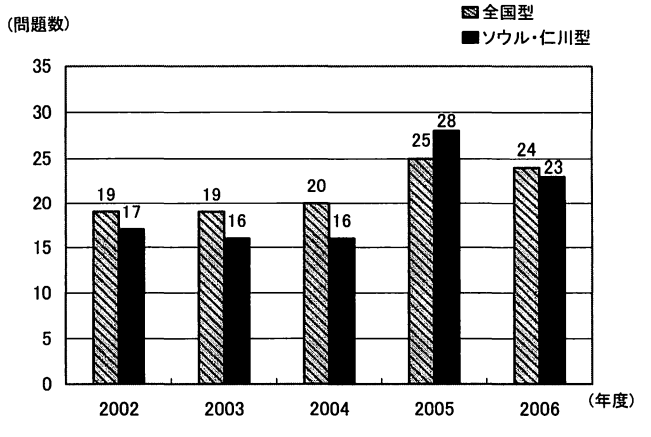
レベルⅠ	言語及び英語教育などに関する知識を記憶する能力	再現
レベルⅡ	言語及び英語教育などに関する知識を特定の状況・文脈に応用する能力	関連づけ
レベルⅢ	言語及び英語教育などに関する知識を利用して何かを達成する能力	熟考・創造

(3) 分析と考察

① 年度別問題数

現行任用試験のガイドラインでは問題数は20問内外となっている。図１は５年間の年度別問題数であるが、2002～2004年度には全国型は約20問、ソウル・仁川型は約16問となっている。しかし、2005～2006年度の両タイプの試験問題は25問前後になっており、若干増加傾向が見られる。

図１　年度別問題数



② 試験問題のジャンル

図２は一般英語、英語教育、英語学・言語学、英文学の４つのジャンルの問題比率を示す。まず、全国型、ソウル・仁川型の両タイプともに４つのジャンルの問題比率はほぼ同じである。概括的に言えば、一般英語は30～35％、英語教育は40～45％、英語学・言語学は20～25％、英文学５％という構成になっている。上述のように、両タイプともに、教科教育学20～30％（英語教育学25％）、教科内容学70～80％（一般英語40％、英語学20％、英文学15％）という割合に基づいて問題が作成されることになっているが、実際には英語教育の比重が高く、英文学はほとんど出題されていない。ここから、日本の採用試験が一般英語に比重が大きく置かれているのに対して、韓国の任用試験は、英語教員としての専門的知識を測定しようとする傾向が強いことが理解できる。

③ 解答使用言語及び解答形式

解答使用言語は、英語が67％、韓国語20％、記号13％という比率であり、英語で解答する問題が多い。2004年度実施のソウル・仁川型の任用試験要項によれば80％が英語、20％が解答使用言語として定められているが、少なくとも５年間の試験を見る限り韓国語20％のガイドラインは守られている。また、2005年度以降は、問題数の増加に伴い、英語での解答が減り、記号形式が増える傾向にある。解答形式については、内容説明、適語（句）選択、空所補充のような解答にあまり時間を要しないものが多く、その他に英文整序、間違い訂正、内容要約の形式がある。

図２　問題のジャンル

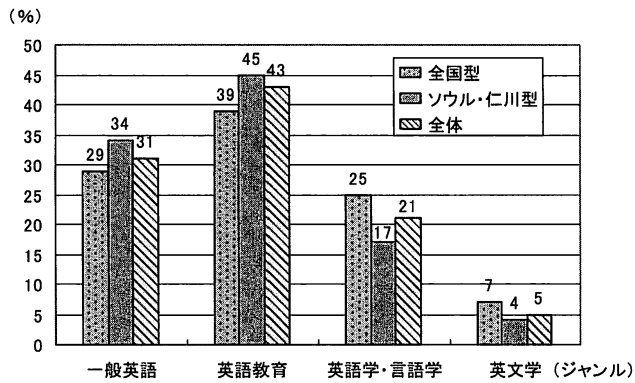
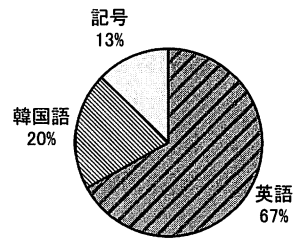


図３　解答使用言語



④ 一般英語

一般英語の内容としては、図４が示すように、社会と言語に関する問題がそれぞれ30％を占める。社会に関する問題は、広告、テレビの影響、フェミニズム、不眠症など、現代社会を映し出すようなトピックが多い。言語については、会話のcode-switching、inner speechの影響、effective communication、語彙の意味変化、会話でのYesとNoといったコミュニケーションをテーマにしたものが主体となっている。また、特徴的なことに、日本の採用試験でよく好まれる異文化理解に関するようなテーマは少ない。さらに、純粋な英文学の問題ではなく、英文学の英語教育での活用といったテーマで、英文学関連の問題が全体で７問見られる。本稿ではこ

れらの問題を一般英語に分類した。その結果、英文学の比率は、ガイドラインでは15％と定められているのに対して、５％になった。

次に、一般英語の問題を別の観点から見れば、１）主題文・要旨・テーマの把握、２）内容の細部について事実や情報を尋ねる、３）文脈の流れと推測、４）内容要約、５）指示英作文、６）上記の形式の複合型のような作問となっている（이현 2004, 2005)。日本の大学入試や採用試験によく見られる内容理解を目的とした内容一致文選択や英文和訳のようなタイプの問題はない。また、論述形式の英作文のようなopen-endedな問題は５年間で４問と極めて少なく、ソウル・仁川型試験にのみ出題されている。

⑤　英語教育

英語教育関連の問題は、韓国でEBSなどから出版されている教員任用試験参考書を参照して、１）Reading指導、２）Writing指導、３）Listening指導、４）Speaking指導、５）文法指導、６）語彙指導、７）発音指導、８）授業方法･技術･計画、９）教授法、10）言語評価、11）言語習得、12）コミュニケーション能力理論、13）マルチメディア・視聴覚、14）教育課程、15）英文学の活用の15カテゴリーに基づいて分類を行った。図５が示すように、まず授業方法・技術・計画や言語評価、教授法など英語教員として基本的に備えていなければならない知識・能力を問う問題が上位にくる。実際に授業で行う際に必要なより具体的な指導に関する問題がこれに続く。このうちマルチメディア･視聴覚、語彙指導、Reading指導、Writing指導が上位にきているのは、

図４　一般英語の内容

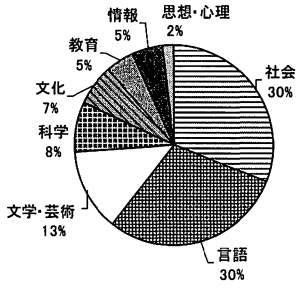
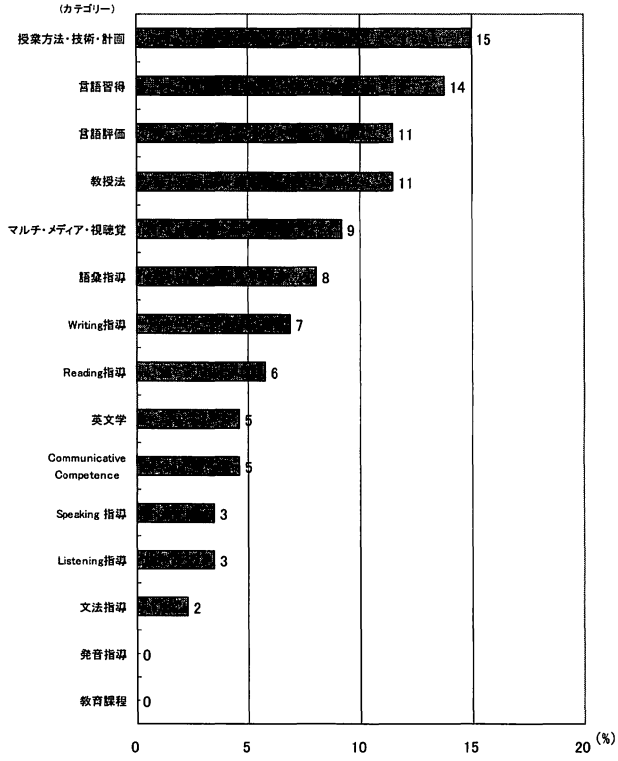


図５　英語教育に関する問題のカテゴリー



韓国の中等学校で授業を実践する上で期待されている英語教員の力を反映していると推察される。一方、発音指導や文法指導が最も低い順位にあるのは授業での重要度が低いと解釈することもできるが、むしろこの種の問題は英語学・言語学の分野で扱われる傾向がある。

⑥　英語学・言語学

英語学・言語学は、1）学習文法・統語論、2）意味論・語用論、3）音声学・音韻論、4）言語習得、5）語彙・語法の5つのカテゴリーに分類される。図2が示すように、例年20～25％の関連問題が出され、ソウル・仁川型よりは全国型の方の出題率が高い傾向にある。この分野の問題傾向を見ると、図6が示すように、学習文法・統語論、音声学・意味論、意味論・語用論の順に比率が高いことがわかる。

これらの問題を解くには英語学・言語学の代表的な専門用語や理論を英語でよく理解しておく必要がある。例えば、文法では照応関係、非文、adjunct、modifierなど、意味論・語用論ではimplicature（含意）、speech act（発話行為）、adjacent pairs（隣接ペア）、politeness（丁寧さ）など、言語習得では母語の干渉、サピア・ウォーフ仮説などの理論、音声学ではtonic accent（音調アクセント）といった用語など、このように日本の教員採用試験では普通問われることのない専門的な問題が出題される。しかしながら、この種の問題も一定パターン化する傾向があり、専門用語を理解していれば即座に解答できる問題となることも否めない。

⑦　英文学

この分野では詩が55％と過半数以上を占め、小説や随筆の比率は低いことを図7は示す。かつての韓国の英語専門筆記試験では文学の問題が重要な位置を占め、文学史や有名作家の作品鑑賞を求めるような伝統的な問題が一般的であった。しかし、近年ではそのような問題は姿を消し、むしろ文学は英語教育における文学教材の意義を尋ねたり、比較的容易な詩・随筆・小説を通して英語読解力を評価したりすることが通常である。したがって、一般英語の分野で読解力が試されるので、小説や随筆は英文学の分野では利用価値が低いと考えられる。

図6　英語学・言語学のカテゴリー

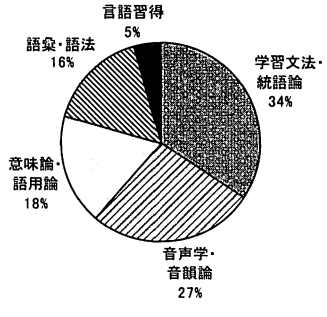
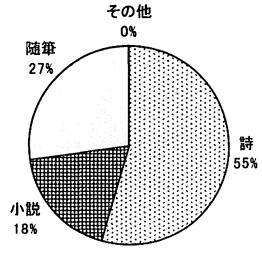


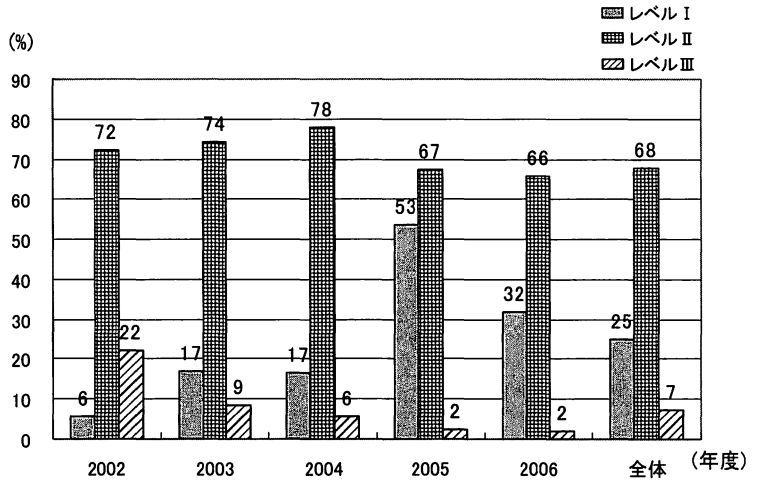
図7　英文学のカテゴリー



⑧　認知レベル

図8は全問題を3つの認知レベルに基づいて分類した結果である。韓国の英語専門筆記試験では、日本の教員採用（英語専門筆記）試験に特徴的な語法や語彙などを問う単純な問題、つまりレベルⅠの問題はあまり出題されない。だが、2005年以降は明らかに単純な言語及び英語

図８　問題の認知レベル



教育などに関する知識を暗記していれば簡単に解けるレベルⅠの問題が増加した。これは試験問題数がおよそ５～10問増えたことに関連すると思われるが、上述のように、断片的知識の暗記への偏重、内容の類型化といった批判を受けて、2004年度教育人的資源部長官の諮問機関としての特別委員会で改善提案がなされたにもかかわらず、実際には改善というより改悪になったように思われる。

一番多いのは言語的知識を特定の状況・文脈に応用する能力を測るレベルⅡの問題である。問題形式は指示内容説明、内容要約がほとんどであり、問題形式と認知レベルが密接に関連していることが理解できる。最も認知レベルが高いレベルⅢは言語及び英語教育などの知識を利用して何かを達成する能力を測る問題であるが、この種の問題はほとんど見られない。なぜなら、criterion-referenced test、時間、問題数、出題範囲、採点の公平性・客観性といった試験の制約がある以上、このレベルの問題を出題することは必然的に難しいと言えよう。しかし、この限界を克服するために、2008年度以降の任用試験は３段階選抜方式をとり、２次試験で英語教育に関連する論文試験を導入する予定である。

ちなみに、日本の教員採用試験では、近年、教員の実践的指導力が重視される傾向にあることから、open-endedなessay、図表についての説明や意見、与えられた条件の中での指導案の作成といった問題が増える傾向にある。それでは、各レベル別にどのような問題が典型的に出題されているのか、具体的に検討してみる。

【レベルⅠ】

問８、問10、問15は2003年度（全国型）試験に出題された問題である。問８は、典型的なKrashenのInput Hypothesisに関する問題であり、comprehensible inputやsilent periodという基本的な用語を知っていればすぐに解ける。問10は、簡単な教授法の説明と指導案からcontent-based instructionという語を導き出す「教授法に関する知識のみを問う単純な問題」である。いずれも専門的な知識（用語）を知っていれば一読して解答が可能である。また、必然的に、問題は簡単な語句によるいわゆる短答式や記号選択形式をとることになる。問15は“English

Teacher" がアクセントの位置によって意味が異なることを説明する音声学の問題である。かつてはこの種の問題が日本の大学入試にもよく出題されていたが、知識としてパターンを暗記さえすれば、簡単に解ける問題である。

8. 다음 글을 읽고, 빈칸을 영어로 채우시오. (4점)

This approach was aimed at the goal of basic interpersonal communication skills, that is, everyday language situations-conversations, shopping, listening to the radio, and the like. The initial task of the teacher was to provide ① (_____ _____)-spoken language that is understandable to the learner-or just a little beyond the learners level. Learners did not need to say anything during the ② (_____ _____) until they felt ready to do so. The teacher was the source of the learners input and the creator of an interesting and stimulating variety of classroom activities commands, games, skits, and small-group work.

① _____ _____

② _____ _____

10. 다음 설명과 수업지도안의 예는 어떤 교수법에 대한 것인지 영어로 쓰시오. [3점]

It is one of the integrated approaches which encourage the teaching of all four skills within the general framework of using language for learning as well as for communication. It integrates the learning of some specific subject-matter content with the learning of a second or foreign language.

Procedures :	**Notes :**
Talk about 'the globe'	whole class
Practice words related to the globe	
Watch a video titled 'Understanding Globes'	pair work
Read a chapter in the textbook	
– discuss the content of the chapter	
– answer problem-solving questions	
Describe latitude and longitude co-ordinates	group work
– find the cities on the globe	with handout
Assignments : reading about 'Earth'	

15. 다음 대화 (1)과 (2)의 *'English teacher'*는 의미가 다르다. 그 이유를 영어 강세와 연관 지어 우리말로 쓰시오. (4점)

(1) A: Do you like the *English teacher*?
B: Yes, I do. He's French, but he teaches English so well.
(2) A: Do you like the *English teacher*?
B: Yes, I do. He's a typical Englishman. But interestingly, he teaches Spanish, not English.

【レベルⅡ】

このタイプの問題は韓国の英語専門筆記試験では非常に多く、上述のように、内容要約や内容説明といった問題形式をとることが多い。問５及び問７は2003年度（全国型）任用試験に出題された問題である。問５は、就職の面接をする際にどのような質問の仕方が大事であるか、与えられた条件、即ち著者の意図を理解した上で、your previous supervisorをテーマにして、適切な面接官としての質問を英語で考える問題である。この問題は個人が持つ知識・能力を状況に応用する問題として良問である。問７は約150語の文章を読んで、英語で与えられた書き出しを使って要約文を完成させる問題である。ただし連続した４語以上の本文中の表現は使用できない。この種の問題は読解力、要約力、語彙力、英作文力などの総合的能力が求められており、認知的にも高度な力が必要である。とはいえ、いずれも出題者は最初から特定の正答を期待しているという点で限界があり、受験者の創造的思考力や表現力を評価するようなレベルの問題にはなっていない。

5. 다음 글을 읽고 주어진 조건에 맞추어 취업 면접시 할 수 있는 질문을 한 문장의 영어로 쓰시오. (4점)

조건 1: "your previous supervisor"를 화제로 삼을 것.
조건 2: 저자가 바람직하다고 생각하는 질문 유형에 맞게 쓸 것.

Deciding whether someone is right for a job is always a little confusing. It's rare for a manager to have all the information he or she needs to make well-informed decisions. But knowing how to ask good questions can make a world of difference. The secret, says psychologist and personnel consultant Kurt Enstein, is understanding the difference between open-ended and close-ended questions. The problem with close-ended questions is that they encourage limited, yes/no answers. Either that or they'll signal to the interviewee what you are hoping to hear. Open-ended questions make no prejudgement, and provide greater insights into the candidate.

7. 다음 글을 읽고, 주어진 단어로 시작되는 요약문을 영어로 완성하시오. 단, 연속된 4단어 이상의 본문 표현을 그대로 옮겨 쓰지 마시오. [5점]

If human beings paid attention to all the sights, sounds, and smells that besiege them, their ability to codify and recall information would be swamped. Instead, they simplify the information by grouping it into broad verbal categories. For example, human eyes have the extraordinary power to discriminate some ten million colors, but the English language reduces these to no more than four thousand color words, of which only eleven basic terms are commonly used. That is why a driver stops at all traffic lights whose color he categorizes as *red*, even though the lights vary slightly from one to another in their hues of redness. Categorization allows people to respond to their environment in a way that has great survival value. If they hear a high-pitched sound, they do not enumerate the long list of possible causes of such sounds : a human cry of fear, a scream for help, a policeman's whistle, and so on. Instead they become alert because they have categorized high-pitched sounds as indicators of possible danger.

Human beings _____

【レベルⅢ】

このタイプの問題数は韓国の英語専門筆記試験では極めて限られており、５年間の総問題数207のうち13問（6.3%）しかない。しかも、完全にopen-endedな問題と判断できる問題はわずか５問（2.4%）と少ない。ソウル・仁川型試験で毎年１題出題されているが、全国型試験には見られない。それらは、３枚の絵を見て70語で英作文をする、editorに手紙を書く、muti-mediaの活用について英作文する、USのfarmingに関する図の変化などを分析し英語で説明するといった問題である。問28は2005年度ソウル・仁川型試験に出題された問題である。これは、韓国の英語教育向上のために英語教員は５年毎にspeakingの試験を受けて合格する必要があるという意見に対して、いくつかの与えられた条件にしたがって80～90語の範囲で自分の意見を述べることが求められている。

問９、問12は2003年の全国型試験に出題された問題である。これらの問題はレベルⅡの問題と判断することも可能であるが、本稿では学校現場の教員から良問であるとの評価があった（脇田・松村 2007）ことも考慮して、あえてレベルⅢに分類した。問９はTestingに関する問題である。ここでは与えられた４つの選択肢がなぜ不適切なのかを英語で説明することが求められている。４つの選択肢が与えられた文章から統語的に形容詞であること明白であるので、解答がweakであることは一目瞭然であり、通常ならば４つの選択肢を全て形容詞にして、文章の内容をよく考えて選択させることが理想である。この問題は平常のテスト・評価に関わる実際的な問題であり、英語教員ならばその重要性を十分認識しているはずである。さらに英語で説明を求められるので、思考力、表現能力、説明能力が問われ、単なる知識では対処できないことになる（脇田・松村2007）。問12も同様であり、Listeningの指導に際して、英語教育の専門家は遅い速度より普通の速度（160～190 wpm）を奨励することに対して、その理由を２つ韓国語で書くように求められている。

28. **Read the directions and write a composition.**

Do you agree or disagree with the statement below?

> **Korean teachers of English should be required to pass an English speaking test every five years for the improvement of the quality of English language teaching in Korea.**

Write a paragraph describing your position, following the guidelines. [8점]

[GUIDELINES]

- **Include a topic sentence.**
- **Support your position with two specific reasons.**
- **Use neat handwriting.**
- **Use approximately 80-90 words.**

9. 다음은 좋은 어휘력 평가 문항이라고 볼 수 없다. 그 이유를 영어로 쓰시오. [2점]

On the way home today, I had to help the _____ woman up the stairs.			
ⓐ happily	ⓑ weak	ⓒ climb	ⓓ health

12. 많은 영어 교육 전문가들은 영어 청취수업에서 느린 속도보다는 보통속도(160-190wpm)로 된 자료의 활용을 권장한다. 그 이유를 2가지만 우리말로 쓰시오. (2점)

①

②

5 まとめ

以上、良質な英語専門筆記試験の研究開発の一環として、韓国の英語専門筆記試験問題を分析・考察してきたが、その中で明らかになった点を改めてまとめておきたい。

① 試験は、特定の項目がどれほど達成されているかを測定するために、criterion-referenced testとして作成される。

② 問題数は、全国型、ソウル・仁川型試験両方ともにほぼ毎年同数であるが、2005年度以降は25問前後と増加傾向にある。

③ 試験問題のジャンルと比率は、一般英語31%、英語教育43%、英語（言語）学21%、英文学５%である。特に英語教育の比率はガイドラインに示されている比率（20～30%）よりもかなり高い。

④ 解答使用言語は、英語が80%、韓国語が20%と定められているが、韓国語20%、英語67%となっている。これに加えて記号での解答が13%あり、最近増加傾向にある。

⑤ 一般英語の内容としては、社会・言語のテーマがそれぞれ30%と多い。さらに、問題自体は、英文解釈のような単純な問題ではなく、readingのスキルを特定した上で、文脈の流れを把握して内容要約をしたり、情報を的確に把握し指示内容を説明したりするような問題である。

⑥ 英語教育の問題は、多様なカテゴリーから出題されるが、特に授業方法・技術・計画、言語評価、教授法などの授業実践を行う上で備えておかなければならない知識・能力が重視されている。

⑦ 英語（言語）学の問題は、学習文法・統語論、意味論・語用論、音声学・音韻論、言語習得、語彙・語法の分野でかなり専門的な知識を問う問題が出題されている。

⑧ 英文学の問題は少なく、かつてのように純粋な英文学鑑賞や文学史の問題は出題されていない。

⑨ 認知レベルで問題を分類すれば、記憶した言語知識を単純に再現するような問題（レベルⅠ）は少なく、言語知識をなんらかの状況や文脈に応用する能力を問う問題（レベルⅡ）がほとんどである。さらに、最も認知レベルが高い言語知識を利用して何かを達成する能力（レベルⅢ）を問う問題は極めて限られている。
⑩ 認知レベルと問題形式とは相互密接に関係している。

韓国の英語専門筆記試験について総括すると、教員に求める知識・能力カテゴリーを細かく分類し、それに基づいて出題しようとするあまりに、広範囲な知識が求められ、どうしても内容的にもパターン化してしまうように思われる。またcriterion-referenced testという試験の特性や採点上の公平性・客観性などの制約のために、求める解答も単純化してしまう傾向がある。したがって、必然的に、open-endedな問題はほとんど出題されない。しかしながら、韓国の任用試験は英語教員に求められる知識・能力を単に漠然とした英語能力に限定せずに、英語教育や英語学などの専門的知識を求めようとしていること、現場の状況に依存した実用的な問題が多いこと、日本の採用試験のように記号や日本語ではなくできるかぎり英語を使って解答させようとしていることは評価に値する。

しかし、現実に、韓国では任用試験の競争が過熱化し、教員志望の学生が試験対策に追われて、大学教員養成課程に悪影響を与えていることや、予備校通いが盛んになっているnegativeな波及効果があることは看過できない問題である。日本でも韓国でも、本来英語教員に求められる能力は、確かな英語運用能力と教科に関する専門的知識に支えられて、教材、生徒の学力・モティベーション、効果的な指導法、教育課程の目標など様々な諸条件を考慮に入れながら学校現場で実践を行い、さらに「反省的実践者」としてより質の高い授業を構想していく能力である。もちろんいわゆる実践的指導力を筆記試験だけで測ることは不可能であるが、現行の専門筆記試験にはまだまだ改善の余地がある。特に、英語教員に求められる知識・能力を特定し、特に問題解決のプロセスという認知的視点からそれらをいかに専門筆記試験問題に反映させるかが課題となる。その際には、「内容」はもちろん「問題形式」にも配慮する必要がある。内容的には、学校の実践に関連した認知レベルの高いopen-endedな問題を導入すること、もう少し学校現場に密着したtestingや教材開発に関する問題を作成し、専門的な能力をいかに応用するかという問題を入れることなどが考えられる。

ところで、グローバル化・情報化の急速な進展とともに、外国語（英語）教育はますます重要性を帯びてきている。この状況の中で、英語運用能力を初めとして英語教員の資質能力の向上は重要な政策的課題であり、そのために教員養成・採用・研修の一貫した総合的な充実が求められている。教員採用について言えば、日本では、教育職員養成審議会第３次答申（1999年12月）が、多様な力量を持った人材確保のために、選考方法の多様化、選考尺度の多元化を図ることを明示している。同様に、韓国においても、教員には人物や適性を含めてより実践的な指導力が求められ、筆記試験に偏った選考方法の改善が求められている。具体的には、2008年度からの人物を重視した３段階選抜方式への転換は、教員任用試験制度が1990年に導入されて以来の大きな改革として評価してよいだろう。

とはいえ、日本でも韓国でも、英語専門筆記試験を含む１次試験は採用への第一関門であり、たとえどれほど優れた英語運用能力や教職への適性を持っていたとしても、一定の得点をとら

なければ2次試験には進めないのは厳然たる事実である。それゆえに、多くの受験者をふるいにかける英語専門筆記試験に優秀な教員を選別する有効性や妥当性が十分に備わっているのか、教員採用試験の中でどのような役割を果たすべきかという問題を明らかにすることは意義がある。本質的な問題は、優秀な英語教員に求められる資質能力とは何かということにやはり帰着する。したがって、この能力理論を構築した上で、できる限り多様な方法で測ること、そして英語専門筆記試験は教員任用試験全体の中でどのように機能し、どのような知識能力を測定するのか明確にすることが、優秀な英語教員の採用、ひいては英語教員の資質能力の向上に貢献すると考える。

注

1）これらの研究は、筆者が代表を務める平成18年度科学研究費補助金研究（基盤研究(C)、課題番号18520465、研究テーマ：「良質な教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発とその波及効果について」［共同研究者：龍谷大学国際文化学部松村省一准教授］の一環として行ったものである。

2）日本の英語専門筆記試験はたいてい1次試験で実施され、2次試験では英語実技試験である。しかし、1次と2次の両方で実施したり、教養試験と同一時間内で実施したりと、実施方法が異なる場合もある。

3）点数配分を公開している都道府県（市）教育委員会はまれである。愛媛県では、1次試験（教養、専門、論策分、面接、学業成績）の総合点1000点のうち、専門試験は中学校300点、高校400点となっている。なお、人物重視の観点から、面接も300点という高い配分になっている。

4）この概念は、『キー・コンピテンシー――国際標準の学力を目指して』（ライチェン, S.D. & サルガニク, R.H. 2006）が示す新しい学力概念、そしてPISA（OECD生徒の学習到達度調査）の数学リテラシーの基本的な能力構成概念を援用した。同書によれば、これからの社会で求められている学力の概念は「コンピテンス」という用語が表す機能的な概念として考えることが適切であろう。このコンピテンスの概念は曖昧で分析的に観察することは難しい。だが、その内的構造の構成要素には広範囲の属性があることは疑いない。そして、需要に対応し、目的を完遂するには、知識、認知スキル、実際的スキル、態度、感情、価値観と倫理、動機付けなどの構成要素を動員することが必要だという一般的な合意がある。現在、日本では実践的指導力の重要性が叫ばれているが、まさにこの実践的指導力とは、上述のような総合的な実行能力であると想定される。

参考文献

伊藤弥香・神保尚武（2004）.「全国公立中・高の英語教員募集内容と採用の観点に関する調査」第1回JACET関東甲信越大会発表、於清泉女子大学。

大谷泰照、林桂子、相川真佐夫、東眞須美、沖原勝昭、河合忠仁、竹内慶子、武久文代（2004）.『世界の外国語教育政策：日本の外国語教育の再構築に向けて』東信堂。

河合忠仁（2004）.『韓国の英語教育政策』、関西大学出版部。

笹島茂・大井恭子・古家貴雄・清水公男（2005）.「公立学校英語教員採用試験の現状と課題――採用試験は機能しているか？――」第44回大学英語教育学会シンポジウム発表、於玉川大学。

佐野通夫（2005）.「韓国の教員養成」第41回日本比較教育学会大会発表、於日本大学。

佐野通夫（2005）.「韓国の教員養成」『世界の教員養成Ⅰ　アジア編』pp.35-57、日本教育大学協会。

JACET教育問題研究会［研究代表者：神保尚武］（2006）.「英語科教職課程における英語教授力の養成に関する実証的研究」平成17年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書。

高島英幸他（1999）.「韓国の小・中学校における英語教育――2年目の現状を4つの授業観察から検討する」『現代英語教育』1月号 pp.38-43。

東京アカデミー（2004）.『2005年度教員採用試験　本試験問題14　中・高英語』。

文部科学省（2006）. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/yousei/index.htm
李明熙（2003）.「韓国の教育改革と教員養成制度」『教育課程』３月号、pp.64-67、協同出版。
ライチェン, S.D. & サルガニク, R.H.（2006）『キー・コンピテンシー――国際標準の学力を目指して』明石書店。
脇田博文（2006）.「英語教員に求められる能力とは何か――日韓英語教員採用試験に関する意識調査からの示唆――」. 第36回中部地区英語教育学会和歌山大会、於和歌山大学教育学部。
脇田博文・松村省一（2007）.「良質な教員採用試験（英語専門筆記）の研究開発――日韓英語教員採用試験に関する意識調査に基づいて――」『龍谷紀要』第29巻第１号、pp.31-51。
Bartel, N.（2005）. *Applied Lingustics and Language Teacher Education.* Springer.
Cho, Dongwan（2004）. Use of Standardized Tests as University Graduation Requirement. *English Teaching*, 59, 1, 251-265.
Chapman, M.（2005）. TOEIC: Claim and Counter-claim. *The Language Teacher,* 29, 12, 11-15. JALT.
Fouser, R.J.（2004）. Public Teacher Employment Procedures and Examinations in Korea. JACET関西支部「海外の外国語教育研究会」１月例会発表、於大学コンソーシアム京都。
Freeman, D. & Richards, J.C.（1996）. *Teacher Learning and in Language Teaching.* Cambridge University Press.
Kam, H.W. and Wong, Ruth Y. L.（2004）. English Education in South Korea. *English Language Teaching in East Asia Today: Changing Policies and Practice.* pp. 241-261. Eastern Universities Press.
Kam, H. W. and Wong, Ruth Y. L.（2004）. *Language Policies and Language Education:The Impact in East Asian Countries in the Next Decade.* Eastern Universities Press.
Kim, Hye-Sook, Lee Man-Hee, Hwan, Gyu-Ho, & Cha, Sung-Hyun.（2000）. A Study on the Establishment and Operational Strategy of National Accreditation Center for Teacher Education Institutes. Seoul: Korean Educational Development Institute.
Kim, Ee-gyeong, & Han, You-kyung.（2002）. *Attracting, developing and relating effective teachers: Background report for Korea.* Seoul: Korean Educational Development Institute.
Kwon, O.（2000）. Korea's English education policy changes in the 1990s: Innovations to gear the nation for the 21st century. *English Teaching,* 55 /1: 47-91.
Oi, K., & Sasajima, S.（2004）. *Comparison of Teacher Employment Exams between Japan and Korea.* Paper presented at the 2nd Asia TEFL International Conference, Seoul Olympic Parktel, Seoul.
The Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology（2006）. Looking for attractive teachers. *http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/miryoku/03072301.htm.*
Tsui, Amy B. M.（2003）. *Understanding Expertise in Teaching: Case Studies of ESL Teachers.* Cambridge University Press.
Wakita. H & Matsumura. S.（2005）. Validating the Employment Examinations for Japanese Secondary School Teachers of English. The 3rd Asia TEFL International Conference in Beijing, November 5th.
Wakita. H & Matsumura. S.（2006）. What are the qualities of "quality" EFL teachers? The 14th Annual KOTESOL International Conference in Seoul, October 28th.
Wakita. H & Matsumura. S.（2007）. What are the qualities of "quality" EFL teachers? 兵庫教育大学『人文論集』第42巻第１・２号, pp.197-207.
김이경 외（2004）. 교원자격 양성 제도 개편 방안 연구, 한국교육개발원.
윤도형（2005）. 영어 교육학 전공 영어 I, 형설.
이 현（2004）. 이현 Mapping전공 영어II, 북타운.
이 현（2006）. 이현 Mapping전공 영어II, 북타운.